

## 鈴木正三

鎌田茂雄



## 石平山恩真寺

徳川家康の生誕地であり、東海道五十三次の宿場町として賑わった岡崎市から、車で丘陵地帯の田舎道を進んでゆくと、やがて石平山恩真寺の入口が見える。左折して樹林の中の坂道を登ると恩真寺の門前に着く。

右側に放生池があり、庭を隔てて佛殿がある。佛殿の背後に鈴木正三すずきしょうさんの墓がある。苔生こけむした五輪塔は深く暗い森影に今もひっそりとたたずんでいる。

寺の右下に滝があり、行者が滝に打たれることができる。かつて雨の日に訪ねたためか、天地は晦冥の中に沈んだように、森も林も暗くいかにも鈴木正三の寺らしい雰囲気包まれていた。

## 正三の生涯

鈴木正三すずきしょうさんは江戸時代初期の曹洞宗の僧で、通称は九太夫、俗名は正三しょうそう、玄々軒、石平道人などと号した。

天正七年（一五七九）三河国加茂郡足助あすけ（愛知県東加茂郡足助町）の鈴木重次の子として生れたが、家を弟に譲り、自ら高橋庄の某家の養嗣となった。慶長五年（一六〇〇）本多佐渡守の部下として関ヶ原の戦に出陣したが、遁世の志厚く、下妻多宝院の良尊や、宇都宮の慧林寺の物外もつがい等に参禅した。ついで慶長十九年（一六一四）、大阪冬の陣および翌年の夏の陣に武功をたてて、郷里加茂郡に二百石を賜った。元和五年（一六二九）大阪城の勤番となった。翌年臨濟宗の大愚について出家した。時に正三四十二歳であった。天下は二代將軍秀忠の治世で泰平となり、正三自身もはや武士としてお役に立つことはないと感じていたのかもしれない。七年、畿内を行脚して神社、佛

閣を拝し、八年、大和の法隆寺において経律を学んだ。同学であった高野山の玄俊律師から沙弥戒を受けた。

その後三河の千鳥山に入つて修行したが、荒行をしたため発病した。その頃、台巖、本秀の二人が正三の門に投じた。寛永元年（一六二四）加茂郡石野村石平山の幽谷に庵を結ぶと、問道者が多く集まり、寛永九年には、佛殿を建てて石平山恩真寺と名付けた。曹洞下の萬安英種、臨濟下の愚堂、雲居、大愚、物外等と交わつた。

後、吉野山、江戸等を歴訪し、寛永十三年（一六三六）丹波の瑞巖寺を再興して石平山に帰つて修行を続けた。十六年八月の二十八日の朝廓然として悟りを開いた。その時の様子は『驢鞍橋ろあんきょう』下に「亦見性の位も無に非ず。是も六十一の歳、八月二十七日、明あきれば二十八日の暁、はらりと生死しやうじを離れ、慥たしかに本性に契かなう」とある。その頃、弟重成と共に天草に赴き、切支丹戦没者のために東向寺を建てて開山とな

り、『破吉利支丹』を書いた。

慶安元年（一六四八）江戸に下つて道俗を教化した。慶安三年（一六五〇）、森川氏開基の四谷の重俊院に移り、ここで『三宝徳用』を書いた。その後熊谷氏が造つた牛込の了心庵に移つて一般民衆のために平易な布教を行なつた。明暦元年（一六五五）病を得て、駿河台の鈴木重之邸に入り、六月二十五日寂した。

年七十七歳であつた。湯島天徳院に塔し、後、下総国吉倉に改葬された。門下に不三、玄石、恵中等があり、恵中は『石平道人行業記』という正三の伝記を著わした。著書には『萬民徳用』『麓草分』『盲安杖』『二人比丘尼』（謡曲）『念佛双紙』『反故集』『驢鞍橋』などがある。

#### 強き心一仁王禪

正三の佛法は仁王禪ともいわれるが、それは仁王や不動尊の氣質を受けて修行するからである。仁王とは金剛力士のことである。甲冑に身を固め、武器

を執つた忿怒相の武人の姿をとるのが金剛力士（仁王）である。金剛力士は古代インドの武器である金剛杵こんごうしを持つているが、それは元来は敵を打ち砕くための武器であるが、佛教においては如来の智慧を表すようになり、如来の智慧が人間の煩惱を打ち砕くことを意味する。金剛力士はつねに金剛杵を手に持つて釈尊を守り、その説法を助ける存在である。金剛力士は伽藍の守護神として寺院の山門などの左右に配され、仁王（二王）と呼ばれている。

また不動尊は不動明王のことであるが、不動明王とは、本来、インドのヒンドゥー教の最高神であるシヴァ神の多くの呼称の一つであつたが、佛教にとり入れられて『大日経』系の如来の教勅を承けて直接に一切衆生を教化する姿を現わしている。もしその教えを障碍する煩惱などの魔があれば利剣をもつてそれを断ち、衆生の修行向上を助けるものである。顔に忿怒相を示し、右手に劍、左手に繯索けいそく（鳥獸を捕えるわな、転じて衆生を撰取する表徴）を持ち、赤

土色の裙（下ばき）のみを着け、盤石上に坐つたり立つていたりする。身から遍く猛火を出して一切衆生の無明煩惱を焼く。殊に日本において非常な尊崇を受け、不動とは堅固不動の菩提心を表すものとされてゐる。

正三は『驢鞍橋』上の中で、

一日示曰、佛道修行と云は、二王不動の大堅固の機を受けて修する事一つ也。此の機を以て身心を賁滅すより外、別に佛法をしらず。若我法に入らんとする人は、機をひつ立、眼をすえ、二王不動、悪魔降伏の形像ぎやうせうの機を受、二王心を守て、悪業煩惱を滅すべし。

と言つてゐる。佛道修行は、二王や不動尊の大堅固な氣質を受けて修行することが大切であるという。佛法に入らうと思う者は氣力をひき立て、眼をすえ、二王不動が悪魔を降伏する形像の氣質を受け、仁王の心をしっかり持って、自己の悪業煩惱を滅しなればならないのである。

武士出身の正三は強い心を持つことを強調した。『驢鞍橋』中には次のように説かれてゐる。

一、常に心を持つべきよう、強馬に乗たる時の心を忘れず昼夜守るべし、油断せば、煩惱の敵発り来て、苦患悪業あるべし。一、心をはりかけ、眼をすえて、奥牙をかみ合せ、生死を急に守て、忽死する心を用うべし。一、千騎万騎の敵の中へ、唯一人かけ入る心を守るべし。此の如き心持て、此心純熟する時は、心無事にして、万事に使うに自由なるべし。

心の持ち方は、荒馬に乗った時の心持ちを昼夜忘れずに守ること、心をはりつめ、眼を据え、奥歯をかみしめ、生死をぐつと見つめて、只今死する思いをもつて事をする事、千騎万騎の敵の中へ、ただ一人駈け入る心を持つことが大切であるという。このように心をしっかり持てば、心に何のわずらいもなく、すべてのことに自由自在に対処できるようになるという。

正三は修行の心がけについて「殊に修行と云は、強き心を以て修する事なる間、出家よりは侍ひよき也」〔驢鞍橋下〕と述べており、強い心をもつて修行することが大切であるといっている。

### 佛心と念佛

正三は人間の心には本来、佛心が具っていると説いた。

佛心に悪事無し。佛心に生死なし。佛心に名利無し。佛心に内外無し。佛心に差別無し。佛心に退屈無し。佛心に貪欲無し。佛心に執著無し。佛心に惑乱無し。佛心に瞋恚無し。佛心に愚癡無し。佛心に最負無し。佛心に取捨無し。佛心に好悪無し。佛心に是非なし。佛心に我慢無し。佛心に諂誑無し。佛心に愛念無し。佛心に妄想無し。佛心に憶病無し。佛心に動転無し。此時無一物也。佛心に有物は唯広大の慈悲許也。

〔「反故集」巻上〕

佛心は無一物であり、あるのは慈悲ばかりであるという。佛心は本来具ったものであるが、人間の欲心、瞋恚、執著、死を恐れる気持が佛心をおおいかくしているのであるから、それらを断ち切ることが重要である。

そこで正三は『反故集』巻の上の中で次のように説くのである。

まず欲心の強い人はこの欲が我を悩ますものであると知って、至心に祈念して欲をたிரらげべきである。いかりの強い人、執著心の強い人も、そのいかりや執著が自分を苦しめる敵であると知ってこれをたிரらげるべきである。死を恐れる心の強い人は、死を恐れる心が、わが仇であると知ってこれを調伏させるべきであるという。

正三の思想の特色としては、生涯にわたって熾烈な求道心に貫かれていたことや、生活に即した佛法をうち立てようとしたことがあげられるが、宗教的実践としては、禪と念佛の双修を提唱したことがあ

げられる。

正三は念佛について次のように説いている。

一日示曰、皆行ずる処に眼を著て強く行ずべし。

先、念佛を申さん人は、念佛に勢を入れて、南無

阿弥陀佛〜と唱うべし。如是せば、妄想いつ

去と無自ら休べし。(『驢鞍橋』上)

念佛を申す人は、念佛に力を入れて、南無阿弥陀

佛々と唱えよと説いた。念佛をすれば妄念妄想も

自からなくなるという。

正三は禅と念佛の双修をすすめたが、その念佛は

禅の念佛といえるようなものであった。『念佛草紙』

は美しい尼僧と念佛者が対談したものであるが、正三は有名な一遍上人の、

となふれば佛もわれもなかりけり南無阿弥陀佛

なむあみだ佛

の歌を引用して、この歌に説かれた念佛こそ正念の

念佛であると説いた。この一遍上人の歌に対する、

佛もわれもなくて、いずれのところを成佛というの

かという尼僧の問いに対して、唯心の浄土が語られ、

心の浄土、心の弥陀を知らればよいといっている。心

の弥陀を知るにはただすべてを打ち捨てて念佛すれ

ばよいと教えたのである。

(東京大学名教授)



写真集 好評発売中

# ブツダの道

釈尊の足跡をたどる

撮影

丸山 勇

詩 二橋すすむ

文 内藤喜八郎

二五〇〇年にわたって東洋の心の風土を潤しつつづける佛教。今、その源流を尋ねて、智慧と慈悲の人・ブツダに到る。精神のふるさとであるインドの大自然のなかで仰ぎみたブツダのすがたを、清新なカメラアングルと詩と文でつづるブツダへの讃歌――

A4判 上製 58頁

¥ 3,090 (税込) 送料380

在家佛教協会

東京都千代田区大手町1-6-1

郵便番号100

電話03-3214-5024 振替00100-3-17765